天竜川の淵伝説

「熊谷家伝記」を中心に

笹本 正治

天竜村坂部の集落　　山裾を流れる天竜川

目次

はじめに……3
一　右衛門三淵……7
二　蓼汁と若者……11
三　機織り淵……20
四　川死霊……25
五　天竜川の淵に関する伝説……30
おわりに……40

はじめに

我々が天竜川に抱く思いは人それぞれである。時々の思い出、場所によってその感じ方も異なる。しかしながら、誰もが一様に特別な感じを抱くのは天竜川の深い淵。青々として底が見えず、周囲の岸が切り立って、何とも言い様のない不安にとらわれる、異様な世界の淵であろう。本書では、この天竜川の淵にまつわる話を『熊谷家伝記』という本を中心にして、取りあげていきたいと思う。

それでは『熊谷家伝記』とはどのような記録だろうか。長野県の最南端、静岡県と愛知県に接して下伊那郡天竜村がある。この村の中央を天竜川は流れるが、天竜川の西側、村の南端に坂部の集落が位置する。ここは昭和二七年（一九五二）国の重要無形文化財に指定された、冬祭りの催される場所として全国的に有名である。坂部に関してもう一つ忘れてならないのが『熊谷家伝記』という、熊谷家の歴史を書き綴った記録である。これを今牧久は次のように説明している。

くまがいかでんき　熊谷家伝記　下伊那郡天竜村坂部の郷士熊谷家に伝わった家伝記。一三五二（文和一）年、初代貞直が当地に土着し、開発を始めていらい、家憲によって代々書き継がれてきた記録を資料として、明和年間に一二代次郎太夫直遐が整理し、編集したもの。四〇〇余年にわたる膨大な記録であるばかりか、私記にとどまらず、将軍、領主、代官の交代や変遷など天下の大勢や、当時の社会組織、経済事情、慣習、民間伝承に至るまで、南伊那・東三河の山村の生活が細大もらさず克明に記されている。この伝記は柳田国男博士によって発見され、絶賛された。宮下本（下伊那郡阿南町和合）、佐藤本（愛知県）の二本がある（註1）。

ここに説明されているように、『熊谷家伝記』は特に民俗学の世界では大変有名な本である。

民俗学で柳田国男とならび称される折口信夫は、大正六年（一九一七）最初に『熊谷家伝記』を見たと昭和二二年（一九四七）に書いている（註2）。折口信夫が信濃・三河・遠江に入るようになったきっかけには、早川孝太郎の花祭などの紹介があり、折口に『熊谷家伝記』を知らせたのも早川と考えられる。そして早川自身もその著作の中でこれを用いている（註3）。

今牧が触れているように、『熊谷家伝記』を有名にしたのは柳田国男だった。彼は『東国古道記』でこの本について触れ、「久しく名を伝へて居た珍書であるが、それを前年謄写版にした篤志家があり、最近は更に又活版にもしたから、もう埋没の危険だけは無くなつて居る。文體用字に統一があり、又後世にならぬと判らぬ筈の事も少々は書いてあるから、先祖の自筆に據つたというのは信じられぬが、内容には存外新たな附加へが無い」（註4）と評価した。なお、柳田はこれより早く昭和四年（一九二九）の「熊谷彌惣左衛門の話」（註5）で既に『熊谷家伝記』を利用している。

また社会学の大家有賀喜左衛門は、昭和九年（一九三四）に「村の記録」の中で、「正史に関連する記述の不正確さはあろうとも、この家伝記の興味は村内部の生活を記述することにあるのであるから、家系の粉飾的記述や年号における多少の相違や外部の出来事に対する記述の不正確さは、多くの場合ははなはだしい障碍とはならない」（註6）と述べた。

その後もこの本を用いての研究が続いた。竹内利美は昭和一九年（一九四四）に『中世末における村落の形成とその展開』（伊藤書店）を出したが、後に改訂し『「熊谷家伝記」の村々－村落社会史研究－』として昭和五三年（一九七八）に御茶の水書房より出版された。氏は一巻の貞直記については「関郷伝承以外は全く用がない」とし、二巻の永徳元年（一三八一）から永正八年（一五一一）に至る間は「史実のほどは何ともいえないが、さして相互矛盾するところはない」とする。三巻・四巻は永正九年から天正一九年（一五九一）であるが、「殊に天正検地時の村内記事はたしかで、本篇では最も活用している」とし、以後の記事は史実として理解し、村落の形成過程を描いた。

宮本常一も『山に生きる人びと』で「二代目を直常とよび、直常は文字を解したようで重要な事件があると一々書きとめておいた。そして一二代の直遐まで、年代からいうと永徳元年（一三八一年）から明和五年（一七六八年）までの間、およそ四〇〇年間の家伝記を残した。それを直遐が整理しなおしている。したがって各代の人びとの直接書いたものではないが、内容的には一応信頼できるものと思われる」（註7）、あるいは『天竜川に沿って』で「この家伝記の記事はかなり正確なものと見られ」（註8）としている。

地理学では、安藤慶一郎・矢守一彦が『国境いの村』で、「家伝という性格から、ことに草創のころを記した巻の若

い部分は、史料としては上等のものではないが、その限界をわきまえて読めば、中世の村の成り立ちを知る上で、またとない貴重な材料である」（註9）と評価し、活用している。

こうした流れとは別に、一九五八年に千葉徳爾は、『熊谷家伝記』の筆者直遐を民俗学でいう伝承者のタイプだとして、この本をフォークロアの方面から使うことを提唱した（註10）。

このように『熊谷家伝記が』活用されたのは、これが既に活字化されているからである。柳田が触れている謄写版刷りのものは、佐藤本の複製で大正一一年（一九二二）から翌年にかけて、年代記を欠いた七巻までを出した。ついで昭和八年（一九三三）に佐藤本を底本に宮下本、謄写版を参照して市村咸人の校訂によって伊那史料叢書として山村書院から四冊本で出た。ちなみに市村は「熊谷家伝記は其量に於て内容に於て数多き郷土的旧記類中、一頭地を抜くものである」（註11）と評価している。さらに佐藤本は愛知県北設楽郡富山村に寄贈され、昭和五六年（一九八一）から年代記を含めた七巻が複製された。

以上の事実によって、『熊谷家伝記』という本がいかに重要視されているかは、明らかであろう。そして、従来の研究にあっては、全体としてこの本の記載は事実としてとらえられ、特に山村のできかたが具体的にわかるということで着目されてきた。

ところで、この書物の舞台となった信濃・三河・遠江の三国の間の地帯は、山中を天竜川が縫うように流れており、天竜川と住民とのつながりが深かったはずである。そこで本書にあっては、千葉徳爾の提言に沿う形で、『熊谷家伝記』の中に見られる川、特に天竜川の淵にかかわる部分を取り出すことで、その記載の背景にある川に対して日本人が抱いてきた感情などを追究してみたい。これによって、『熊谷家伝記』が従来考えられてきたよりはるかに事実が少ない一端も明らかにできるのではないだろうか。そして、このことを通して、天竜川沿いの住民が長い間天竜川の淵に抱いた感情、ひいては日本人が川の淵という特別な場所に抱いた感覚の一端が明らかにできればと考える。

註

1 『長野県百科事典』二三四頁（信濃毎日新聞社・一九七四）
2 『折口信夫全集』第二八巻二六七頁（中公文庫・一九七六）
3 『早川孝太郎全集』第四巻三六八頁など（未来社・一九七八）
4 『定本柳田国男集』第二巻二四九頁（筑摩書房・一九七二、

本書は雑誌『旅』に一九四九年に連載され、一九五二年に長野県の上小郷土研究会より刊行された）

5　『定本柳田国男集』第五巻三三九頁（筑摩書房・一九六八）

6　『有賀喜左衛門著作集』第五巻三三一頁（未来社・一九七二）

7　宮本常一『山に生きる人びと』一二四頁（未来社・一九六四）

8　宮本常一『私の日本地図　1　天竜川に沿って』一一四頁（同友館・一九六七）

9　安藤慶一郎・矢守一彦『国境いの村』二五頁（学生社・一九七二）

10　千葉徳爾「田仕事と河童」（『信濃』第一〇巻一号・一九五八、この論文は『河童』岩崎美術社・一九八八にも収録されている）

11　市村咸人「『熊谷家伝記』の刊行について」（『中部芸術』一九三三年五月号）

湯立てをする熊谷家当主の伝一氏　（昭和40年頃）

一　右衛門三淵

それでは具体的に『熊谷家伝記』を見ていこう。内容の叙述は私が訳したものである。巻ノ三は五代目の直光記である。この巻には天竜川、もしくは川にかかわる記事が散見する。なお竹内利美は「少なくともこの巻（第三巻－笹本注）以後の記載は『旧家伝記』の『書きつぎ記録』を主体に、直遐が復元改修したものとしてみてよいと思われる」（註1）と、この巻以降を事実に基づくとして、大変高く評価している。

享禄三年（一五三〇）十月五日、日向の舟本右衛門三（舟本氏は熊谷家の初代貞直の乳人の家と伝えられ、坂部郷開郷にも当たった船田孫右衛門〔土着後改姓〕の家で、熊谷家と最も関係が深い。近世末には名主役も勤めており、大杉家とならんで熊谷家に次ぐ家である）（註2）が鉄砲の試しをしようと熊谷家にやって来たので、直光は標的を見定めて打つようにと言って弾薬を渡した。

翌六日に日頃から恨みがあったのか、右衛門三は同僚を理不尽にも六人打ち殺してしまった。そこで彼をからめ捕らえて、一二日に大池が島へ引き出して淵へ沈めたけれども、この右衛門三は無双の大強力の者だったので、縛っていた縄を引き切って淵からかけあがり、見物していた者たちを投げたりして危険だった。やがて大角五郎八と右衛門三の兄の左門太の両人が組み止めたところを、直光が真二つに切ってこの淵に沈めた。その時に右衛門三がわめき叫んだ声は、半里よりも遠い日向の親の耳にも聞こえたという。

その後、大池が島の淵に右衛門三の魂が残って、その淵に立ちはだかったため、人々は恐れてその辺りに行くことができなかった。それに加えその亡霊に出会った者は、必ず四、五日ずつ病気になったので、光国和尚に願って血脈（けちみゃく、在家の受戒者に授けられる法門相承の系譜）を申し受け、その淵に納めたところ、その後幽霊は出なくなった。そこでこの淵を右衛門三淵と名付けた。

ちなみにこの右衛門三は大力のみならず、声の音が高いことは突き鐘のようだった。このために釣鐘右衛門三という異名をとっていた。常に彼の家の上で村の用事を連絡するのに、呼ぶ声がここまで手に取るように聞こえた。あるとき盗賊と思われるものが七、八人、萩の平に忍んでいたのを見つけだして村へ大声で連絡したが、右衛門三の大音

声に恐れて彼らは逃げ去り、この村に入らなかった。
日向の前の橋を二〇人かかっても架けることができなかったのに、右衛門三が他所から帰ってきて、一人で難なく架けた。そこで彼の力は二〇人力を越えていたと思われる。右衛門三が架橋したことを知らないで村の者が翌日人数を出して現場に行って見ると、彼が夕べのうちに橋を渡したということで、皆すごすごとただ帰ってきた。

ここで扱われているのは二〇人力という大力の持ち主の右衛門三、しかもこの人物は橋を独りで架けることができた人物だった。橋はこの世とあの世とをつなぐものと考えられ、本来人間の支配するような場所ではなく、中世ではこれを作るのにも勧進という方法が用いられ、僧侶がその主体をなしていた（註3）。つまり右衛門三はその意味で、橋をも個人の力で架けることができる二〇人力の人物として、特別な力を持った者として意識されているのである。そのような人物を取り押えた、大角五郎八と左門太を家臣として持ち、しかも右衛門三を即座に一刀のもとに直光が真二つにしたという、この記載は直光の武勇を示している。全体で最も重視されているのは光国和尚の法力である。こうした話の筋立てと、鉄砲が伝来したのが天文一二年（一五四三）であることからして、この部分の記載は事実ではなかろう。

この話が事実ではないとしても、注目すべきは普通の人ではない右衛門三を処刑するのに、縄をかけて淵に沈めようとし、これに失敗すると体を真二つに切って、淵に沈めたことである。このことは右衛門三のような、あの世とこの世との接点にいるような者でも、川の淵ならこの世からあの世へと送り出すことが可能だと考えられていたことを示すものであろう。つまり、淵という場所は川の中でも特別な場所だったわけである。

処刑に用いられる、従って溺れ死にするだけの深さをもった坂部の淵ということから、右衛門三淵は天竜川にあったと思われる。しかもその淵には右衛門三の魂が残り、亡霊となって祟った。淵は亡霊の出る場所として意識されている。明らかに『熊谷家伝記』を書いた直遐にとって、天竜川の淵は特別な場所だったのである。

ちなみに、坂部の瑞光院にはこの右衛門三淵にも関連した光国和尚の守り刀があったという。伝説によれば次の如くである。

むかし坂部の瑞光院に光国和尚の守り刀といわれた霊剣があった。狐つきの者が一たびこれを頂けば、狐はたちど

ころに退散し、夜泣きする子の枕元に一晩これを置けば、夜泣きが止むといわれていた。惜しいことにその刀は、寺の小僧に持ち逃げされて今はない。

昔、坂部の地頭熊谷直光という者が子細あって浪人の山伏を切り殺した。程なく家来の右衛門三郎という者が、大罪を犯した咎によって、これを右衛門淵に沈めた。その後その二人の死霊が祟って、色々の災いをなしたので、三河国善智識光国和尚に祈祷を頼んだところ、悪霊はことごとく退散してしまった。この地にしばらく足をとどめた光国和尚が、やがてこのところを去る時に、形見のしるしに直光に残したのが、この相州三原の正宗の短刀だといわれる（註4）。

先の『熊谷家伝記』の記載とともに、いかに光国和尚が法力をもった僧であったかを、この伝説も示している。

なお、ここで問題なのは川の淵に亡霊が出るということである。このようなことは伝説として、他にも天竜川水系に伝わっている。

[ア] お玉の火

昔、生田村（現、下伊那郡松川町）にお玉というみなしごの娘があった。身よりといっては一人もないので、村の庄屋に引き取られて、毎日いそいそと働いていた。お玉はかわいく、赤いたすきをかけて、裏の小川で洗い物などをしているのを、通り掛りの人達が振り返って見ていくほど良い娘だった。

ある日、庄屋の家に大勢の来客があって、その後片づけをしている時、お玉はそそうで大切な皿を一枚落として割った。その家の主婦というのが良くない人で、今微塵に割れた皿の前へ両手を付いて、ひたすら詫び入るお玉の額を手元の棒でしたたかに打った。可哀相なお玉はとうとう追い出されて、痛ましい傷を押えてしおしおとその家を出ていった。誰に頼るというあてもないお玉は、亡き母親の形見の品々を袂に包んで、泣く泣く歩いた。

天竜川を大島村（現、松川町）へ渡る宮ケ瀬橋のあたりは、水が渦を巻いて大きな淵になっている。お玉は赤い鼻緒の下駄をとぼとぼと引きながら、何時か知らぬ間にこの淵の岸に立っていた。

頼るところもない辛い世の中に生きるより、死んだ父母のそばへ行って、一つ蓮の上に乗る方が、今のお玉にとってはどんなにしあわせに思われたであろう。お玉は観念の目を閉じて合掌した。

赤い鼻緒の下駄が波のうえをふわふわと流れていった。

そのことはすぐに村へ知れた。村の人たちはお玉を可哀相に思って、話はそれからそれへと伝わっていった。

しばらくすると怪しい噂が立った。小雨が糸のように音もたてずに降る闇の夜に、毬のような青い火の玉が、山手の方からふわふわと浮かんでくる、それが天竜の川筋まで出ると二つに割れて、その一つはやはりふらふらと川伝いに下の方へ漂っていく、他の一つは橋のあたりまで来てぽっかりと消える。村の人たちはそれをお玉火と呼んで、可哀相なお玉のことを今でも哀れんでいる（註5）。

［イ］赤子淵

下伊那郡清内路村の天竜川に注ぐ黒川に赤子淵がある。昔、夜盗の群れが領主の屋形を襲った。それも、タイマツを沢山燃やし、鐘や太鼓を鳴らしたから、屋形の方では多くの軍勢と思い違いをして、家来がみな逃げ去った。

一人の下僕が領主の子を背負って、この淵まで逃げてきたが、逃れ難いと観念して、子供を淵へ投げ込んだ。それからは、岸に立って耳を澄ますと、水底から赤子の泣声が聞こえてくるといい、岸に残る手形はその赤子のものだという（註6）。

川は国境（註7）になることがあることでも明らかなように、人間の社会を隔てることが多い。また川を流れる水は、人間を清めたりするのに用いられる。盆の供物や疫病送りなどを川に流すことも広く見られる。つまり、川そのものが我々の世界（この世）と神々などの世界（あの世・異界）とを結び付ける特殊な要素をもつのである。そうした川の中でも、以上見てきたように淵は、死者の霊魂が留まりやすい場所、この世の人間をあの世に送りつけるのにうってつけの場所だと、特別に意識されていたのである。

註

1 竹内利美「序一『熊谷家伝記』五ノ巻解題一」（『熊谷家伝記五ノ巻』・富山村教育委員会・一九八四）
2 竹内利美『「熊谷家伝記」の村々』一五一頁（お茶の水書房・一九七八）
3 網野善彦「境界領域と国家」（『日本の社会史　第二巻　境界領域と交通』岩波書店・一九八七）、拙著『戦国時代の天竜川』一五頁（建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九九一）
4 岩崎清美『伊那の伝説』二七一頁（歴史図書社・一九七九）
5 同右四二頁
6 一志茂樹・向山雅重監修、浅川欽一編『信州の伝説』一四二頁（第一法規出版株式会社・一九七〇）
7 拙稿「堺川の位置をめぐって」（『諏訪市史研究紀要』二号・一九九〇）

二　蓼汁と若者

引き続いて、『熊谷家伝記』の三ノ巻に次のような記載がある。

天文六年（一五三七）一二月の中旬、熊谷直光は田辺国憲を同道して福島（天竜村福島）の金田善司のところへ弓遊びに行ったが、その時に珍しい話を聞いた。前年の天文五年の一二月に直光が善司方に一宿した時の饗応として、たった今浜から上げたばかりのような赤魚の、生のままで塩漬けしていないものを焼物にして出してもらった。直光は時ならぬ珍しいものをと挨拶して味わい楽しんだ。

今度思い出してこの話をしたところ、善司が言うのには、去る天文三年の九月下旬に、年の頃二〇歳ばかりの美麗な男がどこからともなくやって来て、麦代を耕す場所を見まわり、家来たちに負けず劣らず働き、食物は何でも好んで食べた。嫌いなものはなく特に麦飯は好物でよく食べた。ところがある時蓼の冷や汁でみんな食事をしていたのに、その男はこの汁の香りが良くないと言って、不機嫌の様子で麦飯も食わずに、いずかたともなく帰った。男は翌年の九月、またまたどこからともなくやって来て、麦代耕しの仲間に入って働いた。一二月二〇日までは二日置き、三日置きにやって来て働いていたが、家来の中に悪い心をもった者がいて、一二月二〇日の夕飯の汁に蓼の穂を入れ、その男に食わせたようで、彼は一口飲むとそのまま「ハッ」と言って駆け出し、血を吐きながら北の輪へ飛び込んだが、それから後には遂にやって来なくなった。

彼が来てから去る一二月二〇日までは、この家に客人がある時には、その都度客の人数のほかに魚一つずつを添えて釜の蓋の上に出してあった。不思議なことだと思ったが、家の吉祥だと理解して大いに喜んでいた。この男は竜神が遣わしたのだろうか、彼が来ていた間当家は大いに幸いだった。ところがあの蓼汁に当たって死んだのだろうか、今年は麦代耕しにも参らず、客人がやって来ても魚も見えないので、彼の魚もあの男の志かと思っているのだけれども、残念の至りである。

右の悪心を企てた者が誰かわかったならば、生け捕りにしてかの淵に沈め、せめて竜神の憤りを詫びんと思っているのだけれども、かれこれ延引しているところに、当年の正月二日の夜半過ぎに家来の者たちの寝所に何とも知れない者がやって来て、家来一人を引き出して「蓼汁の返報思

い知らせん」といった。この声に驚いて皆が騒ぎ立てて、寝床を見たところが一人見えなかった。実に奇妙な夢を見たものだと話した。

すると田辺国憲が言うのには、去る応永年中の自分までに六代以前の藤左衛門堪教の代に、我が家にも実に良く似た事件があった。これも蓼汁を嫌い、兼ねてその話をしていたので、試みに汁へ蓼を入れて食わせたところが、たちまちのうちに駆け出して蘿石の淵へ飛び込んでから、その後は参らなくなったという話を伝えている。詳しくは金田が物語ったのと同じだと宗助が話した。

要するに直光が天文五年に金田善司を訪ねた時、大変新鮮な赤魚を食べたことを思い出しその話をした。善司が言うのには、それより二年前に農作業を手伝ってくれる若者が来て、あるとき蓼汁を出したら姿を消した。翌年もやって来て天文五年一二月二〇日までいたけれど、家来の中に悪い心の者があり、蓼汁を食わせたので、若者は血を吐きながら北の輪へ飛び込んだ。この若者が来るようになってからは、客が来るたびに魚が一つ釜蓋の上にあった。それが直光の食べた赤魚だった。ところが蓼汁を食べさせてからは、魚もなくなったので、あの魚は若者が持ってきたのだと思う。犯人を捜し出したいと思ったが、それが出来ないうちに正月二日の夜半過ぎに誰かが、家臣を一人引き出して「蓼汁の仕返しだ」といって連れていってしまったというのである。

この話では若者が竜神の使い、あるいは魚と深い関係にあると描かれている。ところがこの若者は蓼汁を嫌い、これを食べた途端に血を吐いて北の輪に飛び込んだ。善司が悪心の者を生け捕ってかの淵に沈めようとしていたことからすると、北の輪というのは川の淵である。天竜村福島で淵のある大きな川というと天竜川である。同様の話が田辺国憲の家にもあるという。この田辺氏は市原（富山村市原）に住む。市原も天竜川沿いである。少なくても天竜川沿いにそうした話が分布していたようである。

そこで注目すべきは、柳田国男が問題にした竜宮小僧である。柳田によれば諸国の谷川に小僧淵がいっぱいあって、中には河童が現われたというのもある（註1）。以下先の話に関係しそうな事例を挙げよう。

［ア］ 久留米木の竜宮小僧（静岡県引佐町）

『引佐郡誌』によると、静岡県引佐郡の鎮玉村には久留米木の大淵があって、昔竜宮から小僧が出てきたという話

が残っている。この小僧は村の家々を巡って、農事の忙しい頃には田植などの手伝いをして助け、夏の頃、にわか雨の降る頃にはすぐに出てきて干し物を片付けてくれる。土地の者にとっては大変しあわせだったので、行く先々でも喜んで御馳走をした。ただ蓼汁だけは、決して食わせてくれるなと、常々固く頼んでいたにもかかわらず、ある家でつい忘れてそれを出したために、竜宮小僧はその蓼汁を食べて死んでしまった（註2）。

［イ］　オトボウ淵の主（静岡県水窪町）

坂部からは天竜川を挟んですぐ南に位置する周智郡水窪町大字草木には、オトボウ淵という淵があった。昔この村に大きな物持ちがあって、淵の主と懇親を結び、金銭の融通を受けていた。それで家へは度々淵の主からの使者がやって来たが、そのたびに蓼汁は嫌だと繰り返していたのに、あるとき家の者がそのことを忘れて、振舞いの膳に蓼を付けて出したところ、一口食って「しまった」と叫び、そのまま淵に向かって転がり落ちていった。そうして落ち込んだ姿を見ると、今までは人間の通りであったのが、赤い腹をした大きな魚になっていた。それが段々に水の中を流れながら、しきりに「オトボウや、オトボウや」と連呼したので、以来この淵をオトボウ淵というようになった。このことがあってから淵の主との縁は切れ、さしもの物持ちも忽ち家運が傾いてしまった（註3）。

［ウ］　碧淵の河童（愛知県富山村）

愛知県富山村の市原の田辺家では、屋敷のすぐ下が碧淵になっていて、いつも河童が出てきて農作業の手伝いをしたり、来客の折には必ずアメノウオ（アマゴの別名）（註4）を二尾ずつ、河原からとってきて台所口に置いてくれたりした。この河童は平日は同家の竈の上に住まっていたといい、または釜の蓋の上であったとも言うが、とにかく姿は人間の通りで、円座に座って御器で御飯を食べた。河童が竜宮から持ってきたという河童に食事を与えた御器は今も伝わり、円座も前は保存してあった。何時の頃のことかこの家の召使が、誤って河童に蓼汁を食わせたところが、非常に苦しがって天竜川に転がり落ちて、そのまま帰ってこなかった。このとき、屋敷の前一帯に広々と耕されていた畑を突き崩しナギを起こしたので、以来田辺家も次第に衰運に傾いたという。

［エ］　富山村の天竜川のカワランベ

坂部に富山村から嫁に来た人が次のように語っている。昔は天竜川にカワランベがおったそうだ。実家では、家のまえの川原にカワランベがおって、それが何かっていうと、奇麗な女の人に化けてやって来てお手伝いをしてくれる。川原の淵のそばの橋の上に行って、「今日はこういうことができたで、お膳三〇枚出して貸してくれ」というと、岩へ三〇枚出して貸してくれた。人寄りが終り、その岩の上に持っていって返すと、誰にも見えないように淵のなかに吸い入れてしまう。実家にはその河童が持ってきてくれたというお椀があった。河童は家にお客が来るたびにやって来て、一生懸命はたらいてくれたが、いつも「俺には蓼だけはくれるな」といっていた。あまりにこのように言うので、ある人が面白がって食わした。そのとたん血の泡を吹いて流れていった。それからは、お膳も貸してくれなくなった（註5）。

［オ］　河童がアメノウオに（愛知県豊根村）

北設楽郡下津具村から、豊根村津川へ越す途中に二子島というところがある。津具川の岸にある砂地であるが、近くに蛇淵があり、大蛇が住むと言い伝えられている。昔はこの二子島が一帯の田地で、某という物持ちの所有であった。あるとき主人がそこで働いていると、傍らへ一人の小僧体の者が繁々とやって来る。その様子が怪しいのであるいは河童ではないかと疑い、試みに弁当のお菜に蓼を入れて来て昼飯の折に与えると、その者が一口食って、「しまった」と叫びたちまち近くの蛇淵へ飛び込んでしまった。翌日そこへ行ってみると、淵の中央に巨大な魚が腹を上にして浮いている。拾い上げてみると見事なアメノウオであるので、早速持ち帰ったが、肩に担ぎあげてもなお尾の端が地を離れぬほどの大きなものであった。それを一家揃って煮て食ったところ、たちまち毒にあたって、ことごとく死んでしまい、その家も滅びたという。

この話の別の説では、その時蓼を食わしたのではなくて、鉄砲を用意して撃ったという。そして一家魚の毒にあたって死んだが、一方洪水があってことごとく田地を荒らしてしまい、今の砂地になったのだという（註6）。

［カ］　スミドン淵の河童

同じ愛知県北設楽郡東栄町小林にも大谷地という旧家があって、屋敷の下を流れる振草川にスミドン淵という淵があったが、この淵のカワランベ（河童）も毎年田植の手伝

いに来たり、また膳椀を貸してくれたりした。この辺でゴンゲノボウと称する田植祝の日には、姿こそ見えなかったが、昔から上座へ一人前の膳をすえる例になっていた。後にこの家の者がそれを煩わしく思うようになって、ある年のゴンゲノボウに御馳走のなかへ蓼を混ぜておいた。河童はそれを食って、「おお辛、おお辛」と叫びながら、谷を転がって振草川に落ちていったが、それ以来淵は浅くなり、その旧家も何かにつけて不幸が続いて、衰微してしまったと伝えている（註7）。

［キ］　川田のカワランベ

①　天竜川の上流に位置する長野県下伊那郡阿南町川田にも似た話があった。この村の川田（天竜川の東の段丘上に展開する集落）の大家という家の後ろに、一坪ほどの井戸のような池があり、昔はこの池に手紙を書いて浮かべておくと、膳椀を貸してくれた。またこの池からはカワランベが出てきて、田植の手伝いに来たり、鋤鍬の類を貸してくれた。田植の忙しい際には竈の火も焚いてくれた。それがある時この家の主人が、田植振舞いのオセチの中へ蓼を混ぜて食わせてからは、手伝いに来なくなり、また膳椀も貸してくれなかったという。

②　この話は、現在でも次のように伝わっている。大下条川田に鎌倉時代の落武者といわれ、部落切り開きの「お家」と呼ばれる家がある。この家の田植や稲刈りなどは地区の人全部が出てした。終ると盛大な骨折りの振舞いがあった。沢山のお膳や椀がいるので、「客膳何人分、お椀何個入用」と書いた紙を天竜川の大淵に投げ込んで、川のヌシから貸してもらっていた。

大淵は、お家から少し下ったところから、天竜川を見下ろす急な山を、雑木の助けを借り六、七〇メートル下ったところにある。下流にダムができてから砂で埋まってしまったが、相当な広さを持ち、今でも当時の恐ろしさを思わせる姿をしている。

お願いをすると、その時には必ずじいさんがついてきて、水汲み、火焚きなど、それはこまめによく働いた。このじいさんは「わしは蓼が嫌いだから、これだけは御飯につけないでおくれ」といっていた。ある時、若い女衆がじいちゃんどんな顔をするだろうと、面白半分に朝飯の味噌汁に蓼を少し入れて出した。その汁を一口吸ったじいさんは悲鳴をあげて外に飛び出し、天竜川目がけて駆け出した。よたよたしながら天竜川の川音の聞こえる竹藪の手前の田んぼまで来て、遂に倒れて動けなくなっ

て死んでしまった。それからはどんなにお願いしても貸してくれなくなったという。

水田の基盤整備前までは、倒れたといわれたところに石を置き、周りに南天を植えてあった。

その後、お家の屋敷内の樹齢二〇〇年余になる松の根方に、石で刻んだ「屋形」のような小さな祠を造り祭った。土地の人はこれを「カワランベー様」と呼んでいる。

カワランベー様は、雨ごいの神様としても大変ご利益があるといって、日照り続きのときなど村人は、このカワランベー様を担いで大淵に下り、きれいに洗い清めて祭りをした。すると不思議に雨が降ったといわれ、昭和十七年頃までこの行事が行われたという（註8）。

［ク］ 禅門淵

河野（下伊那郡豊丘村）のホッキの南、万年橋の少し上流に当たって断崖絶壁が走り、天竜川の水が淀んで大渦を巻き、深く黒ずんだ淵がある。これを禅門淵という。この淵へ天竜の本流が流れ込むと、泉竜院に何か不思議なことが起こると言い伝えられている。むかし泉竜院に大きな法会とか寺の大事な集まりがある時に、御客様のお膳やお椀が足りなくて困ったことがあった。そういう時には禅門淵へいって、どうか何人分のお膳とお椀とをお借りしたいと頼む。そうして翌朝行ってみると、ちゃんとお膳とお椀を取り揃えて貸してくれたという（註9）。

［ケ］ 竜宮の淵

天竜川の弁天（下伊那郡喬木村）の近くに水の淀んだ深い淵があった。この淵は底なしの竜宮に通ずるとか、鎌倉に通ずる淵だともいわれていた。昔大切な客が来て膳や茶碗や皿を借りたい時は「明日は大切な御客様が来るのでどうか茶碗と皿を貸してください」というように紙に書いて、淵に浮かせておくと次の朝には頼んだものが浮いていた。このようにきれいな皿や茶碗を貸してもらえるので村人は大切に使い、使った後はきれいに洗ってもとの淵に返しておいた。ある年、一人の男がお皿を借りた。御客様が帰ってその皿を洗いながら「こんなきれいな皿は見たことがない、一枚位もらってもいいだろう」と思い、その中の一枚を戸棚のなかへ隠し、残った皿を淵に返した。それからはいくら手紙を淵に浮かせても何も貸してくれなくなった（註10）。

［コ］　かた淵の膳貸し（天竜村大河内）

大河内部落から三〇〇メートルほど下、橋より一〇〇メートルほど上のところにある岩の下に淵があった（天竜川の支流早木戸川の淵）。そこに水神様を祭った祠があるが、昔そこに淵の主である蛇が住んでいた。人寄りなどがあってお膳などが要る時には、お願いするとちゃんとそこに浮いておった。この蛇はかねがね、自分は蓼だけは嫌いだから絶対にくれるなといっていた。ところが、このかた淵に一軒の家があり、そこの婆が蓼を煮て、そこに捨てた。そうしたら七日七夜荒れて、主の蛇は出ていってしまい、淵もいつか浅くなってしまった（註11）。

［サ］　あめ鱒が化けた娘

上伊那郡飯島町の与田切川の下流に鱒岩があって、そのところには大きなあめ鱒（これはアメノウオと同じものである）が住んでいた。ある日、川向かいの中川村飯沼の某の家に祝い事があって、大勢の人が手伝いに行った。そのなかに混じって誰も見たことのない顔の娘が一人、皆と同じ様に立ち働いていたが、いよいよ祝いの宴も終り、一同赤飯の御馳走にあずかって家に帰った。その翌朝、村の一人が与田切川へ網打ちに行き、その岩のところで一匹の大きなあめ鱒を捕った。家に持ち帰り腹を断ち割ってみると、中からまだ消化されていない赤飯が沢山出てきた。川に住むあめ鱒が昨日娘に化けてお祝いの手伝いに行ったということが、漸くそれでわかったという（註12）。

以上の話で特徴となるものをまとめてみると次のようになる。

出典－A（主人公）－B（何をしたか）－C（何が原因でAが消えたか）－D（結果）

『熊谷家伝記』－A・竜神の使い（若者）－B・手伝い・魚－C・蓼－D・家来への仕返し

［ア］－A・竜宮の使い（小僧）－B・手伝い－C・蓼

［イ］－A・淵の主の使者－B・金銭の融通－C・蓼－D・家運が傾く

［ウ］－A・河童－B・魚－C・蓼－D・家が衰運

［エ］－A・河童（女）－B・手伝い・貸し椀－C・蓼－D・貸さなくなる

［オ］－A・アメノウオ（小僧）－C・蓼－D・毒で一家が死ぬ

［カ］－A・河童－B・手伝い・貸し椀－C・蓼－D・旧家が衰微

［キ］－A・河童－B・手伝い・貸し椀－C・蓼－D・貸さなくなる
［ク］－B・貸し椀
［ケ］－A・竜宮－B・貸し椀－C・返さない－D・貸さなくなる
［コ］－A・蛇－B・貸し椀－C・蓼－D・貸さなくなる
［サ］－A・アメノウオ（娘）－B・手伝い

様々な変形があるものの、基本的には淵から竜宮小僧などが出てきて、人間の手助けをしてくれたり、あるいは必要なときに膳や椀を貸してくれていたのが、タブーだった蓼汁を食わしたり、返すべきであった膳などを返さなかったりしたために、再び彼らの恩恵を受けることができなかったというところに共通性がある。こうした話も日本に広く知られており、長野県の事例については田中磐が集めている（註13）。ともかくここでも淵は竜宮につながったり、蛇や河童、あるいは化けることのできるアメノウオが住む場所、つまり異界として意識されているのである。

ちなみにアメノウオというのは、「日本特産の冷水魚で、中部地方から西の本州太平洋側、九州の一部、四国などの渓流にすむ陸封型のマスの一種である。長野県はアマゴの北限で、太平洋側の木曽川と天竜川の水系に分布していたが、近年はヤマメの放流で日本海側河川にすむヤマメと入り混じっている。体の背部は暗褐色で小さな黒点があるが、背びれ尾びれにこの黒点はない。体側には朱紅色の美しい小点をちりばめ小判形の斑紋があるが、降海（湖）型の魚はこの斑紋が消えて背びれの前端が黒色になる」（註14）である。アマゴは、特に産卵期の第二次性徴の現われたものをいう（註15）。この特徴は斑状の婚姻色である。［オ］［サ］にアメノウオが見え、この魚は朱紅色の斑点があるところに特徴があるので、『熊谷家伝記』で天文五年に饗応にあずかったという赤魚も、あるいはアメノウオを意識しているのかもしれない。

こうしてみると、『熊谷家伝記』に見える金田善司の家の蓼汁を嫌った男の話は、天竜川沿いに広く分布している伝承の一部分であったといえる。おそらく『熊谷家伝記』の中に見える話がもとになって、この地域にこのような伝説が広まったというよりも、地域のそうした伝承を取り込む形で『熊谷家伝記』にも記載されたのであろう。この話も事実ではないものの、天竜川の淵に対する特殊な意識が見て取れる。

註

1 『桃太郎の誕生』から（『定本柳田国男集』第八巻六九頁・筑摩書房・一九七一）
2 同右
3 早川孝太郎「河童俗伝」（『民族』三巻五号・一九二八、『早川孝太郎全集』第三巻三六七頁・未来社・一九七八より）
4 松村明編『大辞林』七〇頁（三省堂・一九八八）
5 註3とともに早川孝太郎「河童俗伝」
6 『長野県史　民俗編　第二巻（三）』五九四頁（長野県史刊行会・一九八九）
7 註3と同じ
8 『阿南町誌』下巻九四一頁（阿南町一一九八七）
9 『豊丘村誌』七一六頁（豊丘村誌刊行会・一九七五）
10 『喬木村誌』下巻七九六頁（喬木村誌刊行会・一九七九）
11 天竜村教育委員会編『南信濃天竜村大河内の民俗』一八六頁（信濃路・一九七三）
12 岩崎清美『伊那の伝説』一三二頁（一九三三、歴史図書社より一九八九復刻）
13 田中磐「安曇・筑摩地方の椀貸伝説」（『信濃』第五巻一号・一九五三）
14 『南箕輪村誌』上巻二四〇頁（南箕輪村誌刊行委員会・一九八四）
15 『日本国語大辞典』第一巻四四二頁（小学館・一九七二）

三　機織り淵

三ノ巻には先に見た若者と蓼の話に続いて、次のような話が記載されている。

右（二章で見た話）の珍事について思い出したのは、当所にある機織り淵のことである。先祖の直常の代の初め、嘉慶年中（一三八七～八九）のことだというが、当所の小川端に三〇間（約五四メートル）周り以上もある大岩があり、その上の平らなところが畳四畳敷き分ほどの広さがあった。この岩の上に、年の頃一七、八才と見える、美麗なること無双の美女が、白いすげの笠をかぶり、七日の間機を織っていたのを、日向の舟本右衛門が見出した。彼が皆に教えて多くの人で見物していると、美女が機織りした布をしまったところ、側の流れの滝の水から白い水煙が上がり、その水煙は段々黒雲となり、一時のうちに虚空へ巻き上げ、全てを消してしまったとの言い伝えがある。

そこで今でもその岩を機織り岩と呼んでいる。その後は段々呼び違えて機織り淵という。その女は山優婆で、その後は遠州の秋葉山にも住み、ここでも機を織って、その布を晒した淵を機織が井ということである。この記事は直常記には書いてないが、福島の珍事を聞いてついでに記すものである。

ここでは機織りをしたのが無双の美女で、しかも七日間機を織ったということが注目される。織女というと思い起こされるのは織女と牽牛、すなわち七夕の説話である。ここで七日間と出てくるのはこの七夕を暗示しているのではないだろうか。この七夕と水の神、棚機女との関連はつとに折口信夫の説くところである（註1）。

これと同じ様な機織り淵伝説も多く存在する。『熊谷家伝記』にかかわる地域のものを挙げてみよう。

［ア］　下伊那郡天竜村満島の機織り淵

平岡満島の機織り淵には美しい女の魂が沈んでいる。それで今でもその淵の岸に立っていると、水の底からかすかに機を織る音が聞こえてくる。あるいは高く、あるいは低く、まごうかたもない機の音が波を伝わって、聞こえてくる。昔領主の遠山土佐守に仕えた一人の美しい腰元が、ある夜ひそかにこの淵に身を投げて死んだという。なぜ死んだかはもう今日では伝える人もない。村の人達は何のわけ

も知らずに、ただ機織り淵とのみ呼んで、美しい女のあわれを今に伝えている（註2）。

［イ］　北設楽郡富山村の機織り淵

大字大谷から山沢が天竜川に落ち込む口に機織り淵というところがある。淵に臨んで高く岩がそびえているが、昔この岩の上で美しい女が機を織っていたという話がある。白いすげ笠をかぶって、織った布は岩の上から下の蒼い淵へ長く垂れ下がっていた。それが幾日も続いたので、村の人々も大勢出て見物した。最後に女は機を織り終って、静かに淵の底へ入ってしまったという（註3）。

［ウ］　愛知県豊根村鹿島の機織り淵

豊根村字鹿島にも一つの機織り淵があった。昔この淵の底で、ときおり機を織る筬（おさ）の音が聞こえたという（註4）。

念のため長野県内の事例を二つ挙げておこう。

［エ］　機織り池（南佐久郡臼田町）

田口広川原に機織りの池と弁天の池と呼ばれる二つの池がある。昔は弁天様が機を織っていたところで、池のそばで石に耳をつけるとチャンチャンという音が聞こえてきたといわれる。この池は金物をもって入ることを止められていたが、一人の武士が禁を破って入ったら、刀が池に落ち、橋も見えなくなるまで水が増えたという（註5）。

［オ］　機織り淵（大町市）

平の木崎湖から流れ出る農具川を四〇〇メートル余り下ったところである。今は浅い川底だが、明治の初めまでは深い淵をつくっていた。仁科城主の阿部貞高が木曽義重に攻められて落城の憂き目を見た時、貞高の妻は織機りを背負ってここへ入水したと伝えられる。それで天気の変わり目、ことに梅雨どきになれば、機を織る音が聞こえてくるといい、近くに生える芦は筬芦といって、これを刈ると必ず雨が降る（註6）。

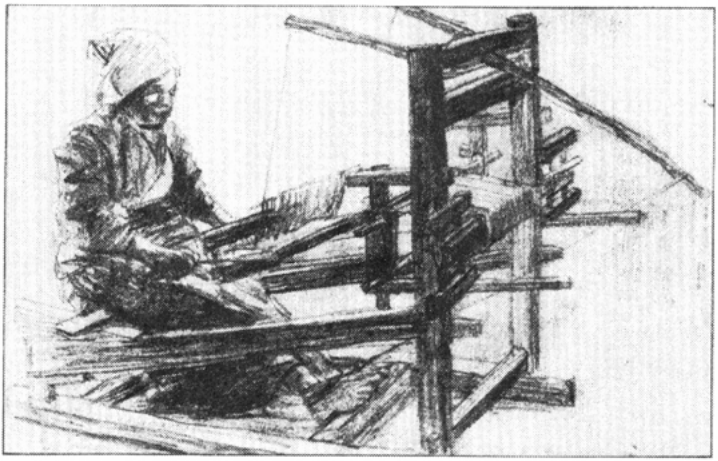
実はこうした機織り淵の研究も既に柳田国男によってなされている（註7）。また折口信夫もこれを問題にしている（註8）。そして柳田国男が監修した『民俗学辞典』では、機織淵（ハタオリブチ）が次のように説明されている。

機織池というところもある。大歳の夜の真夜中とか、静かな雨の日には、その底から機を織る音が聞えてくるという池や淵の伝説。ある家の美しい一人娘が行方知れずになったのが、後に水底に入って機を織ってい

るのを見てきた者があって、堅く口どめされたとか、その音を聞いた者は幸運であるというような話の筋になっているところもあり、機織りの下手な嫁が姑に責められたのを苦にして池に投じて死んだのだというような哀われな話を伝えているところもある。また姥神や水神、あるいは龍宮の乙姫が機を織っておられるのだなどといって、傍に社を祀っている例もみられる。昔話として伝えられているところもあり、木樵が斧や鉈をなくして淵の底へ探しに行くという黄金の鉈などの昔話に近い例もある。村々の祭に神の御衣を毎年新しく作って供えるならわしがあったため、人里はなれた清い泉のほとりに村の娘が機殿を建てて布を織ったのがこのような伝説を生んだものと考えられる。この点について折口信夫は、古代には一人あるいはそれを中心にした数人の処女が村を離れたところに棚を設けて隔離され、海や海に通ずる川から来り臨む若神のために機を織る習俗があったとして、棚織津女がそれであると論じている（註9）。

同じく柳田国男が監修した『改訂綜合日本民俗語彙』においても、ハタオリブチを次のように説明している。

機織淵。または機織池などと称して、そうした水の中



小川芋銭　「はたおり」

で機を織っている女性があるという伝説。多くは大歳の夜とか雨の日などにその音が聞えてくるといっている。全国に広く分布する話であるが、村々の祭に神の御衣を毎年新しく作って供える習わしがあったため、人里離れた清い泉などの水辺で村の娘が機殿を建てて布を織ったのが、このような伝説を生んだと考えられる。福井県大野郡青郷村蒜畠では、機織りの下手な嫁が姑に責められ、それを苦にして実家へ帰る途中、池に投じて死んだという。それから女がこの池のあたりを通ると、機織りの音を聞くようになったという（南越民俗一）ような話も幾つかある。愛知県北設楽郡豊根村では、むかしお姫様がこの淵の傍で機を織ったといい、今も姫の腰かけたという岩が残っている。この側の橋を通る人が櫛を持っていると、その歯の一枚が欠けたという（同県伝説集）。こうした場所に祠を設けて神を祀る例もある。この機の音を聞くと死ぬとか、反対に幸福になるという話もあり、ある家の美しい一人娘が行方知れずになったのが、後に水底に入って機を織っているのを見てきた者があって、堅く口どめされたという話もある（註10）。

つまり、『熊谷家伝記』のこの部分も全国的に広く分布する機織り伝説の一つに過ぎないのであって、これを事実とすることはできない。この地方にも広く分布した伝説を、家伝記の中に取り込んだのである。

機織り淵の伝説ができた原因の一つには、水の流れる音を機を織る音と感じたことが挙げられる。つまり水音をいかに読み取るかということである。この水音を違うように聞くと、小豆あらい・小豆とぎ・小豆さらさらなどとよばれる妖怪となる。それは「水のほとりで小豆をとぐような音がするといい、こういう名の化物がいて、音をさせるともいう」（註11）ようなものである。飯田市下久堅では次のような伝説がある。

北原の今集会所のある下のあたりの道は竹藪が茂り、薄暗く気持の悪いところだった。日暮にここを通ると、小豆を転がすような音をさせるおばけがいて、「あずきあらし」が出たといって怖がった（註12）。

『熊谷家伝記』の話では、機織り淵ということではあっても淵に関係する部分は少ない。ところが、この地域に伝わる［ア］と［イ］の伝説では、機を織った女が淵に入っている。この点は前章までで見てきた異界につながる淵というイメージに結び付く。中世においては様々な音が、この世とあの世とを結びつけるものとして理解された（註13）

が、淵の中から聞こえる水音もそのようなものとして理解されたのである。当然、小豆あらいという妖怪がたてるとされた音も、あの世で作られた音がこの世に伝わってくるものと意識されたのである。ここでも音を媒介として、淵は人間の住むこの世でない、神々などが住むあの世、異界につながっているという意識が強くあったことが判明する。

註

1 折口信夫「七夕祭りの話」（『折口信夫全集』第一五巻一六九頁・中公文庫）
2 岩崎清美『伊那の伝説』一二四頁（歴史図書社・一九七九）
3 『早川孝太郎全集』第三巻三七一頁（未来社・一九七八）
4 同右
5 一志茂樹・向山雅重監修、浅川欣一編『信州の伝説』一四一頁（第一法規出版株式会社・一九七〇）
6 同右一四九頁
7 『定本柳田国男集』第四巻二五頁「遠野物語」、第五巻一四頁「伝説」、第八巻四四頁「海神少童」、第九巻二八九頁「筬をもてる女」、第一五巻三二三頁「家と文学」、第二六巻一八七頁「機織り御前」
8 『折口信夫全集』第一五巻一六九頁「七夕祭りの話」
9 『民俗学辞典』四七一頁（東京堂出版・一九五一）
10 柳田国男監修・民俗学研究所編『改訂綜合日本民俗語彙』第三巻一二二五頁（平凡社・一五七〇）
11 『改訂綜合日本民俗語彙』第一巻二八頁
12 『下久堅村誌』八二〇頁（下久堅村誌刊行会・一九七三）
13 拙著『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』（名著出版・一九九〇）

四　川死霊

五ノ巻は熊谷家第七代直隆の時期にあたり、文禄元年（一五九二）から正保三年（一六四六）までに及ぶ記事がある。この中にも川の淵に関係する部分がある。

慶長二〇年（元和元年＝一六一五）三月、平谷村（下伊那郡平谷村）の熊谷源次郎方から直隆のもとに、「今年の正月下旬に源次郎の家では煩わしいことが絶えない。そこで占ったところ、東の方の父方の先祖の家に当たって北の方に、川死霊の祟りが深いと出た、この子細を知りたい」と連絡があった。

熊谷家の三代目孫次郎直吉の次男の小八郎直頷が、平谷の熊谷弥次郎直武の養子となり、後に玄蕃と称した。この人物に子供がなかったため、当家（坂部の熊谷家）の四代の甚十郎直勝の嫡子が甲府（山梨県甲府市）に奉公し、後に伯父玄蕃の名跡を継いだ。その人物は初名を次郎吉といい、後に玄蕃直康と改めた。この子の玄蕃は武田家の三騎士となった。彼は直隆にとっては舅で、源次郎の父である。このような理由によって当家にも右の川死霊の祟りがあった。中でも平谷は嫡子筋になったので、なお祟りが強いのである。

この川死霊は、去る応永三一年（一四二四）八月二〇日に、福島分内の向方口に待伏（今の「的うぜ」のこと）という場所で、福島の後藤の依頼によって直吉が討ち取った尹良親王の御随臣の三人の衆から発している。彼ら三人は応永三一年八月一五日に天竜川の東大河原で、尹良親王が自殺した際に敗軍となり、一六日に福島の後藤の分内の民家に押し込んで悩ませた。そこで後藤のところから急使をもって直吉に訴えてきたので、二〇日の夜に直吉が出向いて向方口の川端に待伏せして彼らを討った。

すなわち、その夜、かの三人は後藤の家に宿泊した。後藤は謀りごとをもって家来に申し付け、三人に聞こえよがしに外から、「今晩浪人者をこの家に囲っているとの知らせがあったので、熊谷直吉殿が間もなくここにやって来るからお知らせする」といわせた。後藤は大いに驚いた様子で三人をもてなし、「先ず早く左閑部（坂部）口の木戸を打て」と騒いでいるうちに、彼の三人は大いに怖れて逃げる支度を始めた。後藤は「一夜であっても御宿をしたのも多少の縁、道案内を致しましょう」と言って向方口に案内した。かねて打ち合わせてあったことなので、川の渡りに

直吉主従六人が待ち受けて難なく討ち留めた。後で聞けば尹良親王の供奉の衆とのことであった。こういう状況で、たとえ他人は敵対しても直吉の心には少しも討ち取ろうなどという心の兆しはなかったという。当座の日記にはこのことを記し置いたけれども、本意ならぬ事故ということで、直吉記のうちではこのことが削られた。

その後当家へも毎度彼の川死霊の祟りがあった。三人のうちの二人は討ち取り、一人は待ち伏せた下の淵へ沈んでしまったので、この者が川死霊となって出たのである。この場所が当家からして北に当たるため、北の方が弓箭の川死霊に祟られるのである。これは平谷ばかりではなく、すべて直吉以来、当家から別れた熊谷家へは皆々少々ずつ祟るということである。この趣を平谷源次郎方へも返答し、待ち伏せた淵へ血脈を納め、水施餓鬼を読んだところが、家内安全に鎮まったとのことである。

慶長二〇年に応永三一年、二〇〇年も前の事件がしっかり伝わっていたとは考え難く、これも熊谷家が本来いかに勇敢な家であったかを示すために意図的に入れられた話題と考えたほうが良いであろう。ここでは二人は討ち取り、一人が下の淵に沈んでしまったので川死霊になったという。武士の首級を取るという作法がなされなかったということも原因に考えられるが（註1）、問題なのは淵には死霊が留まり、血脈によって鎮まるということで、第一章で扱った右衛門三淵の話によく似ている。

川死霊の祟りと右衛門三淵の話では、川の淵に死霊が留まり、場合によると祟りをなしたことが、ともにモチーフになっているが、川の淵に死霊が現われるという話は他にもある。

［ア］　清内路の赤児が淵（下伊那郡清内路村）

清内路村を流れる黒川の水が、岩に堰き止められて深く水をたたえている赤児が淵の岸に立って耳を澄ますと、水の底の方から赤児の泣く声が聞こえてくるという。昔、伊賀良、山本（共に現、飯田市）のあたりに巣を構えて、近郷を荒らし回った夜盗の一群があった。ある闇の夜に沢山の松明を梯子に結びつけたのを振りかざし、鉦太鼓を打ち鳴らして領主の館に押し寄せた。不意の夜討ちに狼狽した家来たちは、松明の光を見て、大軍が攻めてきたと思い違え、驚き慌てて命からがら逃げ失せた。

その時一人の下僕が、領主の子供を背負って屋敷を逃れ、ようやく黒川の端まで来てみたが、所詮このままには逃れ

られぬと観念し、その子をこの淵の中に投げ捨てて、自分一人だけどこかへ逃げ去った。子供は死んでも魂だけはなお水の底に残って、それから赤児の泣き声が聞こえるようになった。岸の岩に今でも残る、子供の小さい手の跡はその時の名残だそうである（註2）。

［イ］ 左京の赤子淵（下伊那郡泰阜村）

泰阜村字左京の赤子淵、ここでも夕方になると赤子の泣き声が聞こえるという。昔、赤ん坊を残して夫に先立たれた貧しい女が、足手まといの子供を抱えては何としてもその日が暮せなくなった。思案のすえに心を鬼にして、ある夜秘かにこの淵にその子を沈めてしまった。その晩一夜後悔に泣き明かした母親は、その日の夕方、そっとその淵のほとりに行ってみた。そして水底にあって確かに我が子の泣く声を聞いた。母親はそれを聞くと、もう何の躊躇もなく自分もその淵に身を投げて死んだ。それから後、夕暮れ時になるとその淵の水底で赤子の泣く声が聞こえるようになったという（註3）。

［ウ］ 光（上伊那郡箕輪町）

三日町（箕輪町）と長岡（同）の間、天竜川の東岸に、毎夜光があり、双方から出て、途中で出会ったところで、消えて見えなくなる。昔、恋愛の男女の死体を別々に埋めたためだと言い伝えられている（註4）。

［エ］ 坊主投げ（飯田市南原）

知久平から南原に入った天竜川に臨んだところを、「坊主投げ」と呼んでいる。昔、坊さんが倒れていたのを、関わりあいになるのを嫌がって、天竜川に投げ込んでしまったので、この名が付いた。小雨のびしょびしょ降る夜などは、時折お坊さんが姿を現わして、通行する人達を驚かせたという（註5）。

［オ］ 弁天で流されたおさわ（飯田市松尾）

昔、川上の村一番の金持ちの家で働いていた下女におさわという娘があった。おさわはよく主人の言う通りに毎日せっせと働いた。ところが情を知らない、わけのわからない主人は、ある日ふとしたしくじりがおさわにあったといって、おさわをさんざん殴り、そのうえ白木の箱へおさわを押し込んで、蓋にあけた小さな穴から幾匹もの蛇を入れ、その箱を天竜川に投げ込んだ。おさわと蛇を入れた白木の箱は川下の方へ波に揺られて流れていった。弁天まで来た

時、どうしたのか急に水の上に止まって、波の上をゆらゆらとあちこち漂った。

おさわの母親は、おさわのことを聞いて狂ったようになって、娘の流れていく後を追った。そして母親は弁天で待っていたこの箱に追い付いた。「おお、可哀相なことをした。波の上を流れないでお母さんを待っていてくれたのか、みなこの母が悪かった。けれどこの恨みはいつか思う存分晴らしておやり」と言った母は、もう気が狂っていた。白木の箱は母親の言葉を聞くと、間も無くまた波に揺られていった。お金持ちの家はそれから不幸が続いてたちまち衰えた（註6）。

このように、この地域には淵が死につながる場所であり、そこに亡霊が出たり、この亡霊が祟りをすることもあるという認識が広くあったものといえる。

静岡県では「事故がたびたび起こる川のそば、崖のそばをミサキという。そこでは、三年目または七年目にまた事故が起こるという。水窪町にはミサキといわれる地点は何か所かあるが、そのうちの一か所で、最近、一年近く行方不明になっていた人が見つかった」という、そしてこれを「ミサキはそこで死んだ者の御霊を表わす言葉から、地点を表わす言葉に変わったものと思われる。不慮の事故で死んだ者はこの世に多くの未練を残しているので、祀らなければ祟りをなす。またその地点から送ってしまわなければ安心できない。そこでミサキ送りをするのである。『ミサキ』は、御霊の留まる地点なのである」（註7）と理解している。当然、このように事故の起こりやすい場所、それゆえに御霊の留まりやすい場所としての川のそば、崖の下には淵があったことが考えられる。この場合でも、事故の起こりやすい、御霊の留まりやすい場としての淵が重要なのである。

なお、このように川の淵に死霊が留まるということと、川施餓鬼（かわせがき）とはつながるのではないだろうか。この言葉を『仏教民俗辞典』は次のように説明している。

川辺あるいは川中で行なわれる施餓鬼で、主に盆頃を中心に水死者などを供養するためである。施餓鬼の塔婆を水中に立てたり、経木に溺死者の法名を書いてもらい、流す。かつては隅田川の永代橋付近で船上に仏像を祀り、舟の中で念仏をあげ、各船から賽銭と半袋を出し、如来像の紙片を受けて水に流した。こうした舟施餓鬼も現在では大規模に行なわれず、灯籠を流したりする流灯会になったり、あるいは流灯もなく、舟

上で施餓鬼会を修するのみになった。大阪四天王寺では七月十六日に経木流しの行事がある。また埼玉県秩父市大字浦山の昌安寺では八月十六日に河原で川施餓鬼を執り行なう（註8）。

既に述べたように、川自体があの世とつながる場所として意識されていた。それゆえに中世では河原が葬礼の場として重要な意味を持っていたのである。そのような川の中でも、淵はこの世とあの世とを結び付ける、水が澱み、深くて川の中でも別の世界に見えるところから、ここに入ればこの世の人間ではなくなることになり、この世とは異なる、それでいて、死者が本来行くべきであるあの世とも異なる場所として、意識されたのではなかろうか。

註

1　千葉徳爾『たたかいの原像―民俗としての武士道―』一七頁（平凡社・一九九一）

2　岩崎清美『伊那の伝説』一二二頁（歴史図書社・一九七九）

3　同右一二四頁

4　唐沢貞治郎『上伊那郡史』一三六二頁（上伊那郡教育会・一九二一）

5　『下久堅村誌』八〇八頁（下久堅村誌刊行会・一九七三）

6　同右八〇五頁

7　『静岡県史　資料編25　民俗三』九二三頁（静岡県・一九九一）

8　仏教民俗学会編著『仏教民俗辞典』七六頁（新人物往来社・一九八六）

五　天竜川の淵に関する伝説

これまでは『熊谷家伝記』から天竜川の淵に関係するものを取り上げてきたが、このほかにも天竜川水系の淵にかかわる伝説が数多く残っている。以下そうした伝説を取り上げてみたい。

〔一〕　文永寺の鐘（飯田市下久堅南原の文永寺）

①　飯田市下久堅南原の文永寺を開いた隆毫和尚さんが、天竜川の黒瀬が淵の竜神から一つの釣鐘を貰い、大変喜んで、寺へ持ち帰り叩いてみると何とも言えぬ大変良い音がする。毎朝のお勤めにカンカン叩くと叩くたびに鐘は段々大きくなり、とうとう今のような大きな鐘になった（註1）。

②　昔、文永寺の和尚が寝ていると、一人の乙女が夢枕に立って、「私は竜宮からのお使者で来ましたが、聞けばこの寺にはまだ釣鐘がないそうな、一つ良いのを進ぜましょう。明日、まだ夜の明けぬ間に、丈夫な男を五、六人ほど連れて黒瀬が淵へ来なさい」と言った。和尚は不思議な夢と思いながらも大変に喜んで、その夜のうちに屈強な男を狩集め、乙女に言われた通り夜の明けぬ間に黒瀬が淵へ来てみると、淵の水は闇の中で岩に砕けて物凄い音をたてている。

和尚は岸の岩の上に立ち、数珠をさらさら通しもみながら、しばらく有難いお経を読んでいると、ややあって水の面に光がさして、青い水が左右に流れると、その間から釣鐘が一つ浮き出した。そこで和尚をはじめとする人々は、皆で引き上げたが、なかなか重くてとても五人や六人の力ではおぼつかないのをむりやりに寺まで引きずり上げてきた。今日鐘つき堂に吊してある鐘がすなわちそれである（註2）。

③　竜宮の入口だと昔から伝えられている竜丘村ホッキの黒瀬が淵の深い水底から、「南原恋しや文永寺」と呼ぶ声が聞こえてくるという評判が立った。往来の人々が立ち止まって、じっと耳を澄ますと、確かにその通りに聞こえるというので大騒ぎになった。

村中総出で淵の中を探すと、その水底に古い釣鐘が一つ沈んでいた。早速引き上げて撞いてみたら、案の定「南原恋しや文永寺」と鳴る。そこで早速それを南原の文永寺へ納めて、鐘の願いを叶えてやったのが今ある釣

鐘である（註3）。

［二］　黒瀬が淵の大蛇（飯田市南原）

黒瀬が淵に天竜川の初めての橋ができたのは、建長二年（一二五〇）であるといわれている。その頃今田の吉沢藤介という人が、ある雨の降る夜、橋を渡って家に帰ろうと黒瀬が淵まで来ると、急に眠たくなったので岩の内で居眠りをして休んでいると、頭の上から、胴回りが一尺もある大蛇が頭を狙って呑みにかかった。驚いた藤介は無我夢中で家にとび帰ったが、二日ばかりおびえて遂に死んでしまった。

それから後は誰もこの大蛇を見なかったが、明治になって竜東線を作ることになり、この大きな岩を打ち壊したところ、岩の洞穴から回り一尺余もある大蛇の白骨が、頭から二メートルばかり分だけ出てきた（註4）。

［三］　椀借り田と文永寺の梵鐘（飯田市南原）

文永寺から少し離れた堤田（深田）は、昔は随分と深い田で天竜川の黒瀬が淵に続いているといわれた。この田は必要な時に手紙をいれると、お椀やお膳を貸してくれたという（註5）。

［四］　釣鐘淵（下伊那郡天竜村）

平岡村を流れる天竜川に釣鐘淵というところがある。昔ここから釣鐘が上がったので、すぐさまそれをお寺へ納めておいた。日照りが続いて、いよいよ田畑の作物が枯れるという時、村中総出の雨乞いには、この釣鐘をそのところの淵に沈めて水で洗えば、必ず雨が降るということであった（註6）。

［五］　かむろ水神（飯田市千代）

千代村字米川（現、飯田市）の禿が淵（天竜川の支流の米川の淵）。ここは両岸の断崖が深く迫って、樹木がうっそうと生い茂り、そのところに大きな洞窟が開いて、入口に禿水神が祭られ、昔、禿を祭ったものだと村の人は信じている。これは村の雨乞淵で、日照りの年には若者たちが揃ってこの淵に入り、水を浴びて体を浄め、川原の広場で鉦太鼓を打ち鳴らし、大きな輪をつくって雨乞歌を歌いながら踊る。雨乞いの踊りが済んで、七日の間に雨が降れば水神様へは赤い帯を奉納し、下流の入道淵へは鏡を沈める習わしであった。

禿淵に続く椀貸淵には昔お椀を貸した話が残っている。禿水神の氏子たちは、祝儀などがあるとき入用の膳椀の数

を紙にしたため、淵の中へ沈めてやると、翌朝その品が注文通りに岸に揃えてある。用事が済めばそれをまたもとの通り淵へ返す。あるとき借りた椀を一つ損じて返さなかったために、それ以来誰が頼んでも貸してくれなくなった（註7）。

［六］　おとんぼ淵（下伊那郡下条村）

北又地区の天竜川沿いにおとんぼ淵がある。昔、その一帯は天竜川の川原であった。天竜川の水が涸れても、その淵はいつも満水であった。ある日、漁師が魚釣りにその淵の側を通ったとき、魚が突然飛び上がり淵に飛び込んで、「おとんぼよう」といったといわれた。それからおとんぼ淵というようになったという（註8）。

――これは二章の「イ、オトボウ淵の主」の伝説と関係しよう。

［七］　犬市淵・五郎淵（上伊那郡宮田村）

安永八年（一七七九）に書かれた『木の下蔭』によれば、宮田村太田切黒川の入口にある淵を樋淵という。この淵は名前のように細長い二〇間ばかり（約三六メートル）の淵だった。その上の淵は「さかまき」といって、深い淵だった。さらに上を犬市淵という。これは昔百姓が山へのぼって帰るとき、河辺を通ったところ、思いもかけぬ浅瀬に大きな魚がいた。これを捕まえたけれども手に持つことができなかったので、鰓（えら）へ蔓を通し、背負って下って来たが、後ろから「犬市さらば」と声をかける者があった。振り返って見たが人はいなかった。五、六町行って、また前のように呼んだので、振り返ったがさらに人影はなかった。また行き過ぎたところ、川瀬の深いところから後ろより間近く声高く呼ぶと、背負ってきた魚が頻りに跳ねて、ついに川の深瀬に入ってしまい、魚を得ることができなかった。このためにここを犬市と名付けた。大きな魚はアメノウオで、背負った時、尾の先が地に引きたると民俗で言い伝えている。

その上にある淵を五郎淵という。五郎という土地の者が兄弟でヒデ（明りに用いるやにのある木）を取りに行き、この淵に誤って落ちたのでこの名がある。この川はいたって山川で、山の上から木を伐り下ろす。川の両岸は岩がそばだち、水の勢いが強くて渡ることもできない。流れているうちは薪を滞りなく下ろせるけれども、この淵々に至って、薪材木とも水に巻かれて流れ出ることができない。また深淵へ人が入ることもできないので、岩の上から大木の

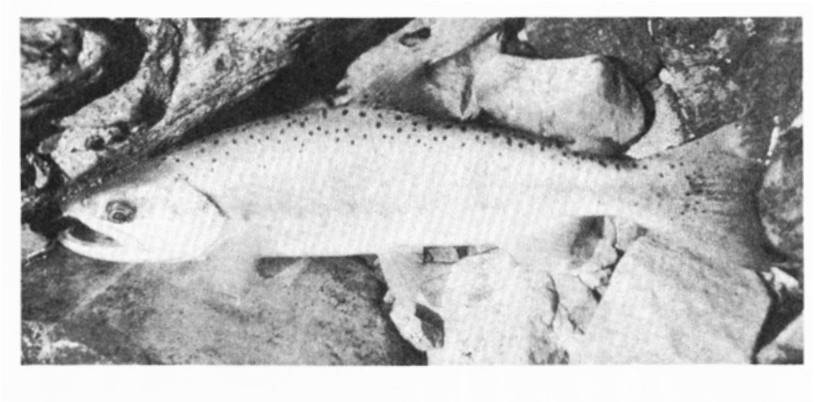
枝を半ば払って淵のなかへ縦にして入れ、その木にすがっており、枝に跨がって長鳶をもって、木の逆巻きを流し出す。甚だ危ないことではあるが、この山家に住む者たちにとっては、常の技だとして恐れない（註9）。

［八］ あめ鱒さらばよ（下伊那郡大鹿村）

明神が滝の青い滝壺の主は大きなアメマスだといわれていた。昔この滝壺で老人が投げ網を打つと、大きなアメマスが網に入った。その鱒は大きく、老人の持っているビクには入らなかった。仕方がないので、老人は魚のエラに投げ網の縄を通して、肩に背負ったが、アメマスの頭が老人の頭の上にあるにもかかわらず、尾の先が地についた。

老人はアメマスの尾を引きずりながら、塩川に沿うた峡谷の険しい小道を、大ナギの蟹沢の淵まで下りてきた。ここまで来ると背負っていたアメマスが突然、「あめ鱒、さらばよ」と、淵にむかって声を掛けた。すると淵のなかから、「諏訪の祭りにまた会おうぞ」と答える声がした。

老人はびっくりして、魚をその場に投げ捨てると、家に戻った。しかし老人はアメマスの声を聞いた瞬間から全身の身震いが止まらず、病み付いて間もなく亡くなってしまった。老人が捕らえたアメマスは明神が滝の主で、蟹沢のアメマスとは夫婦の間柄であったといわれている（註10）。



アメノウオ

[九] 河童の妙薬（駒ヶ根市大久保）

① 大久保の中村家は、天竜川の川奉行を勤めていた家である。この家に伝わる痛風の妙薬は、その製法を河童から教わったと伝えられている。ある日、中村新六殿が川見回りの途中、河童が馬の尻尾に飛び付いて、力一杯水中へ引き込もうとしたが、逆に厩の中に引き込まれ、飼葉桶のなかに隠れていたところを家人に捕まった。命乞いした河童は、ご恩報じに妙薬の作り方を教えたという。河童が住んでいた淵を下がり松の淵と呼ぶ（註11）。

② 上伊那郡高遠の内藤様は三万三千石、その領分内の川を預かる川奉行の中村新六殿は、中沢村の大久保に広大な屋敷を構えていた。近いところを天竜川が流れていて、その深い淵の中には河童（カワランベ）が棲み、時々通行人を水の中へ引っ張り込んで、しんの子を抜くという評判であった。この河童は全身が真っ青で、長い頭髪をはやしていた。ある日、川奉行新六殿の馬が、その淵の畔を通り掛ったところ、水中から河童が手を出して、馬の尻尾をつかみ、力一杯に水のなかへ引き込もうとした。

河童は水の中にいる時は非常に力の出るものだそうである。馬はびっくりして、これも一生懸命に引っ張り込まれまいと足を踏ん張り、ここに河童と馬との力比べが始まった。やや暫くもみ合った末、河童の方が負けて、川から外へ引き上げられてしまった。急いで手を放そうとしても、馬の尻尾をあまり固く手にぐるぐると巻きつけていたために、早速放すこともできず、もがいている間に馬はどんどんと駆け出す。河童はそのままずるずると引きずられて、とうとう新六殿の屋敷の厩の中まで連れ込まれた。

そこで河童もようやく手を放し、水はないかと探してみると、ちょうど馬槽の中に水がいっぱいあったので、

向山雅重　画

早速その中へ入って隠れていた。やがて下男が馬にまぐさをやろうと厩へ来てみると、馬槽の中に河童がいる。不届きな奴だとすぐ捕まえて、主人の前に引き出した。河童は両手を合わせて拝みながら、「命だけはお助けください。そうしたらその御礼に妙薬のこしらえ方をご伝授いたしましょう」と頼むので、新六殿も殺してみたところが無益の殺生だからと助けてやった。河童は大いに喜び、新六殿に妙薬の製法を教えてやり、自分は再び川の中に帰っていった。

それからして、その薬は家伝の妙薬として子々孫々まで伝わり、「家伝痛風薬」という名で、今も盛んに売れている。至極良く効く薬だそうであるが、河童に伝授された部屋でこしらえたのでないと、利き目がないそうである（註12）。

［一〇］河童の綱引き（上伊那郡辰野町）

昔伊那富村の百姓が、ある日飼い馬を天竜川の川端へ放しておいたところ、川の中から河童が手を出し、馬の手綱をつかんで水の中へ引き込もうとした。しかしなかなか馬が動かないので、河童は考えて今度は手綱を自分の胴へぐるぐると巻きつけ、力一杯に引っ張る。馬も水の中へ引かれては大変と、これも一生懸命に踏みこらえて、ここに河童と馬との綱引きが始まった。

そのうちに馬が勝って、河童は自ら外へ引き出されてしまった。馬はそのまま家の方へ走り出す、河童は胴へ巻きつけた手綱を解くこともできず、引きずられたままとうとう百姓家の表まで来て、そこで生け捕りとなった。

河童は涙を流して、命ばかりは助けて下さいと頼むので、百姓もあわれに思い、綱を解いて川の中へ放してやった。それからして毎日、朝になるとその百姓家の前に沢山の川魚が並べてあった。これは河童が危ない命を助けてもらった御礼のために持ってきたものであった（註13）。

［一一］柴太兵衛河童を捕まえること（辰野町羽場）

柴太兵衛という信玄の家来になっていた者の屋敷の下を天竜川が流れ、大きな淵になっていた。六月の中旬頃、この淵で太兵衛が丈三寸の名馬を冷やしていると、馬の尻尾に何か怪しいものがついたので、馬がしきりに驚いて、馬飼いなどを踏み倒し、一目散に厩に帰った。太兵衛が折節厩に行って馬を見ると、一四、五才くらいの者が厩から駆け出して、門前を指して飛んで行く。日が没したためにはっきりとは見えなかったが、太兵衛が自ら追い掛けて留め、

火をともしてみると、その者は猿のような格好で、頭がへこんでいて赤い毛、胴も手足も薄黒く、骨太でたくましく、爪は長く少し曲がっていた。力も強く三人力はあった。右の手を引いてみれば、左の手が右へ出る。左右ともこのようであった。

そこで獄舎に入れておいて、各の先方の侍呼び集め見せたところ、人でなくて獣である。この獣は「これは名馬なので竜宮へ引き来たれといわれたので、このようにした」と言って、涙を流して詫びた。「命を助けてくれたならば、柴一統に仇をなすことはせず、何でも御用の魚をもって参ります、自分はこの淵に長い間住む河童という獣である」と約束したので助けた。それから大分河童は魚を淵の端に出したということである（注14）。

［一二］　漆戸右門大蛇を殺す（辰野町）

羽場の淵から一〇町ばかり川下に同善淵といって、すさまじく冷たく、水の上が青く、あたかも身の毛もよだつような淵があった。七月下旬に家来に鵜を遣わせて漆戸右門が見物しているところに、たまたま小雨が降り、鵜は一円に進まず川岸に上がった。家来たちは淵の中に大木のようなものが見えると言う。鵜遣いたちが陸へ上がったので、右門は怪しく思って、陸には大きな焚火をともさせ、自身も松明を持って、鵜綱を取り淵の岸へ鵜を追い入れたけれども、少しも進まなかった。

そのとき生臭い風が吹いてきた。右門は不思議に思って松明を振って見ると、何とも知れぬ獅子の頭のようなのに両目が日月のように輝き口を開いたものが、沖の方から右門の間近にやって来たので、左の手に松明を振り立て、二尺二寸の大脇差を抜き、首を切ったところ、口を開いてかかってきたので、左の手に持っていた松明をその口の中に突っ込んだところ、水をはたいて淵が鳴動してそのものが見えなくなった。そこで、右門は家来たちを連れて帰り、翌日その淵を見たけれども何事もなかった。三里ばかり下の眼田河原というところに、長さ一〇間ばかりの大蛇が上がった。鬚の長さ四尺、左右に六本の牙、上下に四枚牛の歯のごとく小歯あり、首半分切れ、松明の串を噛んで死んでいた（注15）。

［一三］　大蛇が城（下伊那郡松川町）

大島村字古町に臨んだ要害の地に、高く石垣を築いてそびえる城を台城という。天竜川の水が城の櫓の下に渦巻いて、おのずと作る千尋の淵に、何時の頃よりか大蛇が住む

と言い伝えられ、城の名も大蛇が城と呼び習わされていた。

鶴の毛ほども雲もない晴れた朝、水煙がもうろうと城の櫓に立ちこめることがある。淵の上より立ち上る水気が霧の雨となって城に降り注ぐのを見る人達は、淵の大蛇の仕業だといって、不吉の前兆でもあるように恐れていた。天正一〇年（一五八二）の春、南の国境を越えて伊那に侵入した織田信忠の軍勢は、嵐が枯葉を巻くように、行く先々の諸城を陥れ、いよいよこの大蛇が城を包囲した。数多き戦場の名誉を誇った武田菱の旗指し物も、今日は孤城の上にやがて来たるべき落城の日を待つばかりとなった。

敵が山の上より射かける火箭（ひや）に、城のそこかしこから火の手が上がった。すると不思議にも淵の水が渦巻きとなって上がり、水の底から大蛇の姿が現われたと思うと、にわかに淵の水が雨となって、たちまちに城の火を消した。幾度城に火をかけても、その都度大蛇に消されてしまうので、織田勢は城を落すには淵の大蛇を殺すより外はないと、射手を揃えて隙間もなく淵を射た。しばらくすると淵の面に大波が狂い起って、天地晦瞑の大雷雨、やがて雨のやんだ天竜川の水を真っ赤に染めて、射殺された大蛇は淵の底深く沈んでいった。

城は間も無く敵に焼かれて煙のうちに落城した。今でも城跡の畑を掘り起こすと、真っ黒い焼き米が出てくるそうである。

また一説に、城兵は淵の大蛇が城にむかって吐く、水煙の不吉を忌んで、これを射殺した。不思議の守護を失った城は、間もなく敵に攻め落されたとも言っている（註16）。

［一四］　鰐が淵（下伊那郡泰阜村）

泰阜村明島の鰐が淵には昔大きな蛇が住んでいた。その頃その村に母と娘の二人暮しの家があって、それが年ごろの美しい娘であった。その娘の元へ夜な夜な通ってくる、見慣れぬ奇麗な男があった。日が暮れると何処ともなく忍んできて、明け方になるとどこかへ帰っていく。娘が男に家を尋ねても、「そればかりは聞いてくれるな」と答えた。

不思議に思った母親は、ある夜ひそかに糸と針を用意して男の帰りの頃をはかり、そっとその袂に針を差しておいた。その翌朝、母の手元に残る糸をたどって尋ねていくと、糸はまさしく鰐が淵の中へ引いている。それで初めて毎夜忍んでくる美しい男は、この淵の主の化身ということが知れた。

淵の中では親蛇が子蛇に諭す話し声が聞こえる。「親のいさめを破って忍び歩いた罰で、お前ももう長い生命はあるまい。針の毒は何よりも恐ろしい、間も無くお前は死な

ねばなるまい」といって嘆く。すると子蛇の声で、「たとえ自分はこのまま死んでも、自分の胤は残してあるから、そのように嘆くこともあるまい」という。

やがて娘は月満ちてお産をした。生れたのは蛇の子ばかりで、それがたらいに七杯半もあった。

この淵には椀貸しの伝説もあるという（註17）。

［一五］　竜の住む淵（愛知県富山村）

河内の氏神である諏訪社の社殿は、元集落の外れ、村人たちが「池の河原」と呼ぶところにあったと伝承されている。池の河原は天竜川の河原の一部で、社殿の下には大きな淵があり、淵には諏訪明神の化身の竜が棲んでいたと伝えられた。

多田氏の初住地・曽川のお池大明神を祭った社殿の下にも、新豊根ダムによって、その地が没するまでは深い淵があり、淵には竜が棲んでいると伝えらえていた（註18）。

［一六］　日露戦争に参加した甲賀三郎（下伊那郡南信濃村）

諏訪社の祭神は民間の伝承では、甲賀三郎と呼ぶ大蛇とされる。諏訪明神は武勇の神だったので、日露戦争には諏訪明神の甲賀三郎が蛇体のまま幾度か従軍しているといわれた。まず諏訪湖を出て天竜川を下り、太平洋から日本海に抜け戦列に加わった。そのつど大蛇が巨体をくねらせて天竜川を荒れ下るため、沿岸の田畑は洪水による水害を幾度かこうむったという。しかし今度の太平洋戦争では、どうしたわけか明神様の出征が全く見られず、ために敗戦に終わったと遠山谷では噂されている（註19）。

［一七］　和仁が淵から出た観音様（飯田市時又）

竜丘村時又の長石寺にある観音様は、行基菩薩の作だといわれている。昔泥棒がそれを盗み出して、抱えて逃げようとすると、その小さなお像がにわかに重くなって動けない。お寺の方へ向くと軽くなり、その反対の方へ向くと重くなる。泥棒もさすがに恐ろしくなったと見え、それを天竜川へ転がし込んで置いて逃げ去った。

その頃、下流にある泰阜村の明島に、某といって極めて信心深い人があった。ある夜お観音様が夢枕に立ち、「和仁が淵の底に沈んでいるわしを救ってくれ」という。その人は不思議に思い、翌朝急いで和仁が淵へ行ってみると、水の底からちかちかと御光がさしている。

早速引きあげて見ると世にも有難い観音菩薩であったから、すぐに長石寺へお返し申した。ちょうどその時、その

家では家普請が始まっていた。ところが水の中からお観音様をお助け申した夜、不思議にもどこからか沢山の材木が庭いっぱいに運んであった。しかもそれには鳶口の跡などが一面ついていた。それは長石寺のお観音様が、御礼のために運んできてくださったのであった。その家では大変に喜び、その材木を使って家を建てた。それで今でもその家の柱や梁には鳶口の跡がそのまま残っているそうである(註20)。

このように天竜川の淵は実に様々な伝説に彩られている。こうした伝説の評価については、次章で触れることにする。

註

1 『下久堅村誌』七九六頁(下久堅村誌刊行会・一九七三)
2 岩崎清美『伊那の伝説』一八一頁(歴史図書社・一九七九)
3 同右一八二頁
4 『下久堅村誌』八一七頁
5 同右七九八頁
6 同右一八五頁
7 同右一二八頁
8 『下条村誌』一四〇七頁(下条村誌刊行会・一九七七)
9 『木の下蔭』巻之下(『蕗原拾葉』第九輯、『蕗原拾葉』中巻三〇〇頁・名著出版・一九七五)
10 松山義雄『山国の神と人』一二六頁(未来社・一九六一)
11 『長野県 上伊那郡誌』第五巻民俗上一四三五頁(上伊那誌刊行会・一九八〇)
12 『伊那の伝説』五七頁
13 同右五九頁
14 『小平物語』第三十一(『蕗原拾葉』上巻一四一頁・名著出版・一九七五)、この『小平物語』は小平向右衛門が貞享三年(一六八六)、八三才の時に天文以来の一族の動静を書いたものとされる。その意味では『熊谷家伝記』にもよく似ている書物である。
15 同右
16 『伊那の伝説』一一〇頁
17 同右一七三頁
18 山崎一司『失われた祭り』一五四頁(富山村教育委員会・一九九一)
19 松山義雄『山国の神と人』一二三頁
20 『伊那の伝説』一六一頁

おわりに

これまで『熊谷家伝記』を前提にして、天竜川の淵にまつわる伝説を見てきた。それではこの淵という場所はどのような特徴があるのであろうか。これまで見てきたことをまとめると次のようになる（数字は前章での伝説の番号）。

（一）死者の霊が留まる
　第一章の右衛門三淵・ア・イ
　第三章のア・オ
　第四章の川死霊・ア・イ・ウ・エ・オ
　第五章の五・七

（二）竜宮からの使者
　第二章の蓼汁と若者・ア・ウ・ケ
　第五章の一②③・一一

（三）竜神・大蛇
　第二章のウ・オ・コ
　第五章の一①・二・一二・一三・一四・一五・一六

（四）河童の住む場所
　第二章のウ・エ・オ・カ・キ①②・サ
　第五章の九・一〇・一一

（五）不思議なアメノウオ
　第二章のイ
　第五章の七・八

（六）貸し椀伝説
　第二章のウ・エ・カ・キ①②・ク・ケ・コ
　第五章の三・五・一四

（七）機織伝説
　第三章の機織り淵・ア・イ・ウ・エ・オ
　第四章のア・イ
　第五章の一③

（八）沈鐘伝説
　第五章の一・四

（九）雨乞信仰の場
　第二章のキ
　第五章の四・五

（一〇）その他
　第五章の六・一七

右のうち、（二）（三）は竜神信仰に関係するものである。これは天竜川の源流である諏訪湖の諏訪明神が第五章一六の伝説にも見られるように、竜神もしくは蛇体だとされる

（註1）ことも関係する。諏訪湖から流れ出し、蛇行しながら下っていく天竜川は、天から流れるようにも理解され、水の神でもある竜と特に密接な関係を持つ川として理解されたのであろう。

竜神信仰について亀山慶一は次のように説明している。

龍は古代中国における観念上の霊獣で、わが国の龍神信仰も中国の影響をうけていることは否めないが、その基体は水神の表徴である蛇信仰にあったと考えられる。民間では龍神・龍王・龍宮などの言葉がしばしば用いられるが、いずれも龍信仰と結合して発生したものであろう。龍神は古くから水田耕作を基本的な生業としたわが国では、その生産に不可欠な水を司る神として信仰され、農耕生産と結びついて民間に浸透した。雨乞いが龍神が棲むと考えられる淵もしくは池沼で行なわれるのは、全国的な慣習である。水神としての龍神は雷神信仰とも結びつき、龍神は、しばしば龍巻のときに天にのぼると考えられ、茨城県の北部では、水戸の雷神様から雨乞いの水をもらってくる。水田の農耕儀礼における蛇の登場は、わが国のみならず、ひろく東南アジアの各地に見られる。龍神は、一方漁業生産とも深くかかわり、海を生産その他の活動の場とする人々の間では、龍神祭がひろく行なわれる。浦祭・磯祭・潮祭と呼ばれるものがそれで、この日沖止めをする慣行もひろい。海上生活者の間で、金物を海に落とすことを禁忌にしているのは、鉄を嫌う蛇信仰が龍神信仰の基底にあることを思わせる伝承として興味深い（註2）。

ここには、先に見た天竜川の伝説にかかわる多くのものが含み込まれている。そして、竜神というと説明されているように雨の神としての性格が強いのである（註3）。

この竜神信仰と密接な関係を持つのが（八）の「沈鐘伝説」と（九）の「雨乞い信仰の場」である。このうち沈鐘伝説は、日本に広く分布しており、その多くは竜宮から鐘が来たことになっている。つまり、沈鐘は我々の住むこの世ではないあの世、他界・異界からやって来たとされているのである。そしてこの鐘を用いた雨乞いも各地に見られる。この点については拙著『中世の音・近世の音』に詳述した（註4）。

この二つにおいても、明らかに淵は水神である竜神の住む竜宮などにつながっている。こうした竜宮に対する信仰については、田中磐が長野県などの事例を集めている。その中には後述の機織り淵関係のものもある（註5）。

（四）に出てくる河童が伝えた薬の例も田中磐が紹介している（註6）。なお河童について、石川純一郎は「奥州旧南部藩や津軽一帯ではミズチ、メドチといい、水中の蛇と観ている。これは水霊のことで、（中略）蛇に似て四脚あり、竜に似て角なきものであった。竜はわが国のものではないから、ミズチはもっと蛇に近い。蛇は山の神・水の神の使わしめ、または土地の精霊である」（註7）などと説明している。水神信仰と河童の関係については竹田旦の論文があるが（註8）、この説明にも見られるように河童自体も水の神と考えられていたのである。

（九）（一〇）（一一）の伝説は河童駒引の伝説の典型である。柳田国男は河童駒引の伝説と、水辺に牝馬を放して竜ないし水神の胤を得るという思想と、天下の名馬が水中あるいは水辺から出現するという俗信とは同じ根から発しているとした（註9）。またこれを雨乞いなどにも触れながら世界的な視野の中で論じた本に、石田英一郎の名著『河童駒引考』（註10）がある。

（七）の「機織り伝説」も水にかかわる。この伝説が七夕に関係するものであることは、既に折口信夫が「七夕祭りの話」（註11）で考察している通りである。七夕には「雨が三粒でも降ることになっていて、殊に七夕雨といって短冊が流れるほど降ると良いという所さえある。因幡八頭郡では一粒でも雨が降れば良いが降らぬと二つの星が会い、病の子が生れるから困るといい、常陸久慈郡でも降らぬと疫病神が生れるという。都会風の星の観念から言えば全く逆になっているが、雨が降った方が良いと言い伝えた村々は調べてみると驚くほど多い。また七夕に関連する昔話や伝説はかなりあるが、羽衣説話系統に属しつつも結末が水に流されたり、水中に没したりしているのが目だつのであり、タナバタが恐らく水の儀礼として農耕儀礼の主要な一節ではなかったかと思われてくる」（註12）と説明されるように、水と深い関係を持つ伝承がある。それゆえ機織り淵の伝説も水そのもの、降雨と深い関係にあるといえよう。

ということになると（五）の「不思議なアメノウオ」も、水とりわけ降雨に関係するかもしれない。というのはこの魚は「雨魚」とも書かれるからである（註13）。またこの魚は別にアマゴとも言うが、これは雨子に通じる。（八）では（諏訪）明神が淵の主がアメマスで、諏訪明神（竜）とアメマスの関係を暗示している。このようにこの魚自体が雨にかかわる魚と考えられていた可能性がある。

何れにしろ、このように淵は水の神の住むところとして

の意識が大きい。これに（一）の「死者の霊が留まる」という概念も組み合わせると、淵があの世への入口、もしくは淵そのものが異界としてとらえられていたことは疑いないであろう。

以上を通じて淵があの世、別の世界とつながる場所として、つい近年まで意識されていたことが明らかである。

『熊谷家伝記』は、このような伝説を巧みに組み込んでできているのである。その意味でこの本の三巻以降であっても、本書で取り上げた以外に歴史的事実として評価できない部分が多々あり、この本の使用には慎重な態度が求められる。

千葉徳爾は二章で扱った『熊谷家伝記』の第三巻の蓼を嫌う若者の部分について、『熊谷家伝記』が記している時代の坂部や、福島・市原などにはほとんど灌漑すべき水田がなかった。つまり水を制御支配する手段は極めて貧弱であり、僅少な水量だけが自由になったにすぎなかった。だから日照りのときの水の供給が最も天の恵みと考えられた。河童が農事の手伝いをしてくれると考えられたのはこのような環境においてであった、などと注目すべき指摘をしている（註14）。このように本書を、近世に存在した伝説の世界として読み取れば、それはそれで新たな中世や近世の世界を我々の眼前に示してくれるものと思う。その意味で、今後『熊谷家伝記』は新たな活用のされ方が望まれるであろう。

それにしても、『熊谷家伝記』や伝説の中で、あの世への入り口、異界のある場所として意識されていた天竜川の淵は大きく変貌した。両岸に強固なコンクリートの堤防が築かれ、川の周囲は人工の構築物で囲まれ、広い自然の河原が失われた。多くの場所に制水用のダム、発電用のダムが作られ、水が堰き止められたために、かつては天竜川の流れによって下流まで運ばれていた土砂が上流や中流でも淵を埋めた。以前は満々と水をたたえていたダムさえもが土砂に埋まりつつある。

淵の不可思議さ不気味さは、自然の中で何も手を加えられていない状態で、青々と水をたたえ、しかも底知れぬ深さがあったからだった。ダムの水はいくら深さがあってもあのような不気味さは感じられない。不思議な淵の喪失は治水という側面では間違いなく大きな前進であった。しかし、そうした時代の進展のなかに、長い間人々が川の淵に抱いた気持が失われているのもまた事実なのである。近代的な西洋の技術を導入しての堤防の構築、ダムなどの建設

は、日本人を自然の水から遠ざけ、同時に洪水の被害からも遠ざけた。しかし、自然は本当に制御されたのか、また人間がかつて淵に抱いたような恐れを本当に抱かなくてもよいものなのか、そろそろ真剣に考えるべき時期に来ているのではないだろうか。

註

1 今井広亀「竜蛇信仰」（『諏訪大社』一六六頁・信濃毎日新聞社・一九八〇）、金井典美『諏訪信仰史』（名著出版・一九八二）

2 大塚民俗学会編『日本民俗事典』（弘文堂・一九七二）

3 高谷重夫『雨の神―信仰と伝説―』（岩崎美術社・一九八四）

4 拙著『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』（名著出版・一九九〇）

5 田中磐「河童憑き」（『信濃』六巻一号・一九五四）

6 田中磐「山村の龍宮信仰」（『信濃』第七巻一・六・一二号・一九五五）

7 石川純一郎「河童」（『民間信仰辞典』八三頁・東京堂出版・一九八〇）

8 竹田旦「水神信仰と河童」（『民間伝承』第一三巻六号・一九四九、この論文は『河童』岩崎美術社・一九八八にも収録されている）

9 柳田国男「山島民譚集」（『定本柳田国男集』第二七巻四九頁・筑摩書房・一九七〇）

10 『石田英一郎全集』第五巻（筑摩書房・一九七〇）

11 『折口信夫全集』第一五巻一六九頁（中公文庫・一九七六）

12 『民俗学辞典』三五五頁（東京堂出版・一九五一）

13 『日本国語大辞典』第一巻四四二頁（小学館・一九七二）

14 千葉徳爾「田仕事と河童」（『信濃』第一〇巻一号・一九五八）

笹本　正治（ささもと　しょうじ）

昭和26年12月　山梨に生れる
信州大学人文学部卒・名古屋大学大学院博士課程前期修了
信州大学人文学部助教授（日本史学）
平成３年「野口賞」郷土研究部門受賞
著書　『武田氏三代と信濃 －信仰と統治の狭間で－』1988. 郷土出版社
『戦国大名と職人』1988. 吉川弘文館
『戦国大名武田氏の信濃支配』1990. 名著出版
『中世の音・近世の音』1990. 名著出版
『辻の世界』1991. 名著出版

天竜川の淵伝説

平成４年３月15日　発行

企　画　建設省中部地方建設局　長野県駒ケ根市上穂南７－10
発　行　天竜川上流工事事務所　〒399-41　☎0265－82－3251

著　者　笹　本　正　治　長野県松本市大村387－4
〒390-03　☎0263－46－3744

編　集　㈲北原技術事務所　長野県南安曇郡豊科町高家5279
〒399-82　☎0263－72－6061

印　刷　双　葉　印　刷　㈲　長野県松本市城東２－２－６
〒390　☎0263－32－2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしていますが、後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに濫流する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長　望　月　達　也

「語りつぐ天竜川」目録

1. 伊那谷の気象　米山啓一著
2. 天竜川上流域の立地と災害　北澤秋司著
3. 天竜川に於ける河川計画の歩み　鈴木徳行著
4. 総合治水の思想　上條宏之著
5. 総合治水と森林と　中野秀章著
6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷　松澤　武著
7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷　今村真直著
8. 村境は不思議だ　平沢清人著
9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷　倉沢秀夫著
10. 諏訪湖の御神渡り　米山啓一著
11. 理兵衛堤防　下平元護著
12. 近世　天竜川の治水　－伊那郡松島村－　市川脩三著
13. 川筋の変遷　－天竜川と三峰川の場合－　唐沢和雄著
14. 伊那谷山岳部の降雨特性　宮崎敏孝著
15. 天竜川の橋　日下部新一著
16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井　北原優美編
17. 天竜川の魚や虫たち　橋爪寿門著
18. 天竜川のホタル　勝野重美著
19. 天竜川流域の村々　松澤　武著
20. 小渋川水系に生きる　－人と水と土と木と－　中村寿人著
21. ものがたり　理兵衛堤防　森岡忠一著
22. 量地指南に見る　江戸時代中期の測量術　吉澤孝和著
23. 土木技術と生物工学　－生きものを扱う技術－　亀山　章著
24. 戦国時代の天竜川　笹本正治著
25. 天竜川の水運　日下部新一著
26. 惣兵衛川除　市村咸人著
27. 紙芝居　開墾堤防　－下伊那郡豊丘村伴野－　竹村浪の人著
28. 昭和36年伊那谷大水害の気象　奥田　穣著

（以上既刊）

29. 天竜川の淵伝説 ―『熊谷家伝記』を中心に― 笹本正治 著
30. 天竜川の源流地帯 赤羽 篤 著
31. 東天竜 三浦孝仁 美科英明 共著
32. 天竜河原の開発と石川除 塩沢仁治 著
33. 伊那谷は生きている 松島信幸 著

（発刊中）